

- Ogden, C. K.: Basic English. 24mo. 100p. 1930. London, K. Paul.

平岡伴一氏によれば、850語で日常の簡単な思想の交換から、学術文学などの複雑な思想の発表に至るまですまそうとする Basic English の規則、文法を述べたものである。

- Shaw, G. B.: Spoken English and Broken English.

- Frank, L.: Carl and Anna. 1930.

この二書は Basic English で書かれたものであるという。

- Ogden, C. K.: The Basic Vocabulary. 1930.

- Ogden, C. K.: Brighter Basic, 1931.

- Ogden, C. K.: Basic English Applied (Science), 1931.

- Ogden, C. K.: Debabelization. 1931.

- Lokhart, L. W.: The Basic Traveller. 1931.

この五書は Basic English の参考書である。なお『われらの化学』第4巻第9号の中瀬古六郎博士の文参照。

ド イ ツ

- ・ 文部省『外來語問題に関する独逸における國語運動』A.5. 仮 72p. 大正7年7月(1918年) 文部省

加茂正一「ドイツの國語運動」ードイツ國語協会訪問記ー『國語運動』第2卷第1号 pp. 17—23  
昭和13年1月

加茂正一『ドイツの國語醇化』に再版 項目は次の通りである.

- 一, ドイツ國語協会の存在
- 二, クプレヒト氏との会見
- 三, ドイツ國語協会の仕事

本郷一郎「基準ドイツ語の制定」『國語運動』第2卷第4号 p. 46 昭和13年4月

加茂正一「ドイツ國語協会の設立まで」ードイツの國語運動回想記ー  
『國語運動』第3卷第8号 pp. 52—57 昭和14年8月

項目は次の通りである.

- (一) ドイツ語とラテン文化
- (二) ドイツ語の確立
- (三) ドイツとフランス文化
- (四) 外來語辞典
- (五) 國民的自覚
- (六) 國語協会の設立

ヘルマン・リーゲル(加茂正一訳)「ドイツ國語協会設立の趣旨」『國語運動』第3卷第10号 pp. 38—41 昭和14年10月

加茂正一『ドイツの國語醇化』に再收 ドイツ國語協会の機関誌の創刊号（1886年4月1日発行）の巻頭に掲げられたリーゲル博士の所説の全訳である。

保科孝一「独逸における國語國字改良問題の趨勢」『國学院雜誌』第19卷第3号  
pp. 26—42；第19卷第4号 pp. 1—16 大正2年3, 4月

・ Hildebrandt: Vom deutschen Unterricht.

Paul, H.: Deutschen Gramatik Teil I. ss. 115—135

Geschichtliche Einleitung Kap. 4. Die Entstehung der Gemeinsprache

ここで、史的概観、文章語と國語の規準の問題、標準語などについて述べているという。

山田幸三郎『独逸語発達史』昭和10年4月 大学書林 この第10章 現代の独語の中

52. 國語醇化運動 53. 専門外の学者の活動 54. 詩人文豪の功績 55. 十九世紀の文語 56. 一般独逸國語協会 57. 回顧の部分 (pp. 136—147) は特に参考になる。

加茂正一『ドイツの國語醇化』昭和19年9月 日独文化協会

項目は次の通りである。

一、方言と國語と外來語

二、ドイツ語の発達

三、ドイツ國語協会の醇化運動

四、わが國の外來語の整理

五、支那での外來語の扱方

六、むすび

- Soennecken, Friedr.: Das deutsche Schriftwesen und die Notwendigkeit seiner Reform. 1881 (明治14年)
- Reform. ドイツにおけるラテン文字論者の団体, Lateinischer Schriftverein. (Wiesbaden の Fricke 創立) の機関雑誌であるという.
- Allgemeiner deutscher Schriftverein 会報. 平岡伴一氏によれば, ドイツ文字論者の団体として, 1890 (明治23年) Adolf Reinecke の創立した上記団体の機関誌である.
- Cohn, Hermann und Rübenkamp, Robert: Wie sollen Bücher und Zeitungen gedruckt werden? 8°, ss. 112+x 1903 (明治36年) Braunschweig, Vieweg.
- Reinecke, Adolf.: Die deutsche Buchstabenrift, 1910 (明治43年)
- Brandi: Unsere Schrift. 1911
- Soennecken, Friedr.: Der Werdegang unserer Schrift. 1911
- Ruprecht, Gustav.: Das Kleid der deutschen Sprache. 5. Auflage. ss.80. 1912(大正1年) Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht.
- Kautzsch, R.: Die Entstehung der Frakturschrift. 1922
- Die Deutsche Akademie, hg.: Deutsche Schriftfragen. 1927
- Ehmcke.: Die historische Entwicklung der abendländischen Schriftformen. 1927
- Crous und Kirchner.: Die gotische Schriftarten. 1928

- Delitsch.: Geschichte der abendländischen Schreibschriftformen. 1928
- Kautzsch, R.: Wandlungen in der Schrift und in der Kunstrede. 1928
- Kirschmann, A.: Antiqua oder Fraktur. Eine Kritische Studie. 3. Aufl. 1930
- Stiehl, O.: Die Schriftfrage.: Lateinisch oder Deutsch?  
Was jeder von ihr wissen sollte. 1930

## フ ラ ンス

Brunetière, F.: 「Académie française」の項, Société de savants et de gens de lettres  
『La Grande Encyclopédie』 pp. 185—189 Paris.

ベレエ, 加藤美雄訳 『フランス語の擁護と顯揚』 (佛蘭西文藝思潮叢書十一)  
230p. 昭和18年3月 白水社

松原秀治 「フランスにおける標準語化の歴史」 『コトバ』 第1巻第3号 pp. 19—24  
昭和14年12月 東京 國語文化研究所

松原秀治 「綴字改正運動」 『コトバ』 第6巻第2号 pp. 23—30; 第6巻第3号 pp. 23—28.

昭和11年2, 3月 不老閣書房

1900年前後におけるフランスのつづり字改正問題を取扱ったもの, 第2号においては, フランスのつづり字の歴史について述べ, 第3号においては, つづり字改正運動の歴史, 失敗の原因について述べている. なお, 参考文献を20部あげてある.

岸田國士「國語純化の道」『國語問題篇』（國語文化講座 第一卷）の pp. 38—51 の部分 昭和16年  
7月 朝日新聞社

『Le Temps』の Académie 欄

『Le française moderne』第7卷 1939年 Paris.

この中に、次の論文が収められている。

Albert Dauzat: Une réforme de l'orthographe est-elle possible, N° 1, pp. 1—5

J. Damourette: La réforme orthographique, N° 2. pp. 103—111

J. Damourette: Un projet de réforme orthographique, N° 3. pp. 243—255

A. Dauzat et J. Damourette: La réforme de l'orthographe, les encouragements et les critiques, N° 4. pp. 293—299

Brunot Ferdinand.: Histoire de la langue Française. Paris.

KR. NYROP.: Grammaire Historique de la Langue Française.

廣井生「佛蘭西の國語問題」『内外時論』第11卷第2号 大正11年2月

Vincent C.: Le Peril de la Langue Française.

Dauzat A.: La Vie du Langage. 1922

Danzat A.: Langue française d'Aujourd'hui.

Dictionnaire de l'Académie Française. Huitième Édition, 1932

- ・ アルクシ, フランソワ 『純正文典と第十八世紀におけるフランス学士院』  
1905 (明治38年)

## オランダ

宮武正道 「オランダの綴字法改正運動」 『國語運動』 第3巻第3号 pp. 46—46 昭和14年3月  
新式つづりについては次の本がよいということである。

- ・ Endendijk, J.:—A Dutch Grammar (Parallel Grammar Series) 1915 London.

## ベルギー

「言語問題とベルギーの政変」 (外務省情報部) 一官報所載 『國語教育』 第15巻第6号 pp. 81—83

昭和5年8月

項目ならびに概要, は次の通りである。

- 一, ベルギー言語問題の由來
- 二, 言語問題とジャスバール内閣の辞職
- 三, カトリック, 自由両党の主張の相違
- 四, 社会党と言語問題
- 五, 自由党大会の決定
- 六, 内閣の留任と言語問題の將來

ベルギーはワロン族とフラマン族と人口ほぼ相半ばし, 前者はフランス語を, 後者はフラマン語を使用

し、常に言語闘争を続けている。従来フランス語が公用語となっていたが、フラマン語はだんだん進出して、ついに1929年ガン大学のフラマン化問題のために、ジャスバール内閣は総辞職をしたが、ついに妥協が成立した。

## そ の 他

保科孝一「アルバニアにおける最近の國字國語問題」『國学院雑誌』第20巻第4号

pp. 46—54 大正3年4月

保科孝一「瑞西における國語問題と政治問題との関係」『國学院雑誌』第20巻第8号

pp. 17—30 大正3年8月

藤岡勝二「ハワイの國語問題」『國語教育』第7巻第2号 pp. 66—71, 第7巻第3号

pp. 73—78 大正11年2, 3月

第3号において未完結であるが、その続きがどうなっているか調べられない。

安藤正次「アイルランド自治州の國語政策」—アイルランド語の復興について—

『國語教育』所收, (上), 第13巻第9号 pp. 60—16 (中の一) 第14巻第4号 pp. 60—65 (中の二)

第14巻第5号 pp. 59—64 (下の二) 第14巻第6号 pp. 61—67 (下の二) 第14巻第8号 pp. 62—

66 昭和3年9月, 昭和4年4, 5, 6, 8月

(上)においては、アイルランド語を語る地方に関する調査委員会 Coimisiun na Gaeltachta (1925年1月27日執政府 Execution Council の命によって組織されたもの) の報告書および分布図について述べてある。この委員会の任務としては、この二項目が明示されているという。



「アイルランド語を語る地方と、幾分かアイルランド語を語る地方とを識別し定めて、それらの地方におけるアイルランド語を語るものの百分率を調査し、かつそれらの地方の現在の廣狹および地点を調査して、これを執政府に報告すること。

右の如き地方の行政上におけるアイルランド語の使用、それらの地方における教育上の施設、それらの地方の住民の経済的事情を改善するに必要な手段に 関して調査を遂げ、いかなる方策をとるべきかを建議すること。」

(中の一)においては、調査委員会の大要を具体例を示しつつ述べている。

(中の二)においては、過去の初等教育とアイルランド語との関係を述べ、それに対して、委員会の意見としては、初等教師の充実をはかるべきことを述べている。

(下の一)においては、中等教育に関する意見の概略を紹介している。

(下の二)においては、委員会の報告が自治州政府および社会にいかに関わり受け入れられ、むかえられているか、その反響について記している。

保科孝一『独逸属領時代の波蘭における國語政策』A.5. 144p. 大正10年10月 京城  
朝鮮總督府

保科孝一「南阿の國語問題について」『國学院雜誌』第20卷第12号 pp. 21—30 大正3年12月